

2016.03.07

小原院長の“いま一番気になる人・仕事” スペシャル対談

今川誠×小原忠士

平成2年の開院以来、25年間にわたり地元連島を中心に多くの住民の方から信頼を頂き、皆様の健康に貢献してきた小原整骨院。その小原院長が“いま一番気になる人・仕事”というテーマで、ゲストの方と対談をして頂きました。今回は、「岡山にもっとエンターテイメント」という熱い情熱を持って、ジャズダンスやヒップホップのダンススタジオを経営している今川誠さんをゲストにお招きし、ダンスの魅力やダンサーの育成、岡山でエンターテイメントを定着させたいという思いについて語り合っていました。(2016年1月7日(木) マコトダンスカンパニー 庭瀬スタジオにて)

「僕が本当に求めていたのは、岡山でプロの踊れる場所を作りたい、そこで踊れるダンサーを育成したいという思いだったんです。」

ゲスト紹介

■ 今川誠 (マコトダンスカンパニー)



1979年7月生まれ。福岡出身。13歳よりジャズダンスを始め、18歳でNYに渡米。アルビン・エイリー・BDC・STEP' Sでダンスを習得し、様々な舞台を経験する。帰国後、倉敷チボリ公園内カルケバレン劇場のミュージカルに出演。その後、東京ディズニーシー・ブロードウェイシアター内の「EN・CORE！」に出演。2003年4月に『MAKOTO DANCE COMPANY』を設立。「岡山にもっとエンターテイメントを」その真っ直ぐな情熱は周りの人々の心を動かし、確かな道を創り上げている。近年、TV・ラジオにて多数とりあげられ、岡山からエンターテイメントの発信を目指している。

■ 古閑俊行 (KIT マネジメント 代表)



KIT (ケイアイティ) マネジメント設立。現在は、地元倉敷に帰郷し、司会、CM ナレーション、アナウンスを行っている。

1970年 倉敷市出身。フリーアナウンサー、MC ナレーター、話し方講師。

平成 12 年、テレビ朝日アスク (アナウンススクール) に入学。声優、ナレーター、アナウンサー専科を修了。テレビ朝日アスクマネジメントに所属し、司会、パーソナリティ、ナレーション、リポーターを経験。2004 年より現在まで、競泳日本選手権場内アナウンサー (アテネオリンピック選考会から) として、現場の緊張感をお伝えしている。平成 20 年

■ 小原忠士 (小原整骨院 院長)



1964年 倉敷市出身。地元である倉敷市連島で開院以来 25 年にわたり地域の皆様の健康に貢献してきた小原整骨院の院長。柔道整復師としての技術力は当然、その穏やかな人柄で多くの患者に慕われ、スタッフからの信頼も厚い。2014 年 6 月には株式会社エミリンクとして法人設立。代表取締役となる。

■ 司会進行 俣野浩志 (株式会社パッション)

1970年 岡山市出身。一般社団法人ウェブ解析士協会認定 初級ウェブ解析士。経営修士 (MBA : 香川大学大学院地域マネジメント研究科)。大学でマーケティングを学んだ後 11 年間印刷・デザイン業界に勤務。2009 年に岡山県産業振興財団主催のベンチャー・ビジネスプランコンテストにて奨励賞を受賞。2013 年大学院にて「住民主体の体験交流型プログラムが地域社会に与える影響についての考察」というテーマで、NPO のまちづくりを研究した。

これなら直談判できるだろうと、当時の社長に電話をしたんですが…と切られて…。でもそこは九州男児なもんで、絶対諦めない。それならばと腹を括って、ディズニーに辞めさせてくれと言ったんですよ。

司会：今回は岡山市でダンススクールを経営されている今川誠さんにお越しいただいて、ダンスの魅力や壮大な夢について語り合ってください。まずは今川さんとの出会いを教えてください。

小原：今川さんは、昨年8月に放送の「気まぐれ！メンズトーク」のゲスト出演してくれた佐藤朱莉ちゃんの紹介なんですよ。朱莉ちゃんが通っていたダンススクールがすごいんだということで、何度かイベントを観に行きまして…とっても感動して、お会いさせていただいたのがキッカケですね。

今川：そうですね。小原先生のようなスクール生のご家族以外の方に関心を持っていただいたのは、本当に嬉しいです。子ども達の熱意を観ていただけるのは教える側としてもより一層しっかりしなきゃって励みになりますし…。



古閑：昨年11月末の『DANCE EMOTION 6 ~未来を信じて~』、倉敷市芸文館で開催されたイベント、私も観に行かせてもらいましたが、子ども達のダンスとは思えないくらいパワフルで、聴かせる曲もあり、凄いなあ〜って鳥肌が立ってましたよ！

今川：ありがとうございます。あのイベントは年一回定期的に開催しているんですが、うちのスクールの一年の集大成ですから、生徒達も力が入ってます。朱莉ちゃんもリーダーとしてみんなを引張ってくれて…小さな子ども達も一生懸命踊っていたでしょう。やはり上を見て育つっていうのはあるんだなと、生徒同士で支えあったり、また切磋琢磨したりと…私も関心してます。

小原：学校とは違う面での社会勉強というか、人間関係を学ぶ場になっているんですね。ところで、誠先生はディズニーで踊っていたということを伺ったのですが…東京で活躍されていたのに、あえて岡山に根を下ろされたのはなぜなのでしょう？

今川：ももとはチボリで踊っていたんですよ。19歳～21歳まで。チボリは僕が初めて給与をいただいたところなんです。チボリでは熱心なファンの方が大勢いて、とても楽しかったです。千秋楽には400人くらいファンが並んでくれていたり。本当にファンが素晴らしかった。差し入れや出待ちもしてくれたり、「生きる希望をもらえた」と言ってくれたファンもいたりしたんです。元気を分け与える力が踊りにはあると気づいた。

ところが、チボリがなくなるという話が出てきたんです。そんな頃だったかな…ファンからのお手紙の中に、「ダンスを習いたい、習えるところを教えてください」というのが結構あったんです。このダンス教室がスタートしたキッカケはそこからなんです。もちろんファンとのプライベートの交流はご法度ですが…（苦笑）。

自分でよければ…ってファンクラブに話したら、マスカットスタジアムに借りられるスタジオがあって半年ほど教えていたんです。結局、僕たちは解散したんです。その後ですね、ディズニーへ行ったのは。

古閑：チボリで…。チボリはいろいろありましたからねえ〜。でも開園当初はディズニーに次ぐ入場者数を記録したこともありましたよね。

今川: そうです。でもだんだん入場者数も減ってきて、4年後には経営が悪化して社長が交代したんです。その時から経費の圧縮や、ショー自体を庶民的な企画にして…当時の社長は、頑張っていることへの同情で人を呼ぶという考え方だったんです。でもエンターテイメントはそういうものじゃない。やはりうまくいかなくなって演歌歌手を呼ぶようになった…。

小原: それからディズニーへ。

今川: はい、ディズニーでは 15 年働いてくれと言われたです。ここで働いているダンサーは 400 名くらいいて、階層的な組織になっていましたね。当時僕は、ディズニーシーの A グループ（ディズニーのキャラが出ないブロードウエーの作品を公演するチーム）で、1年目からセンターポジションで踊っていたんですが、若いのに抜擢されたので、妬まれて、いじめられたんです。その時、本当にチボリの仲間は良かったなあって…。ディズニーは規模は大きいけど、向上心や仲間意識が低いんです。

僕は回る技術が上手くて買ってもらえていたんですが、ここは完全な能力給でレベルが高いほど給与がいいんです。でもディズニーで 15 年やることに（当時 22 歳だった）、自信はあったんですが、生きがいとして、自分の生きた証を作れるようなことをしたいという思いがあったんです。

そんな時、たまたまガイアの夜明けを見てみると、チボリの特集だったんです。当時の社長が出ていて、番組の終盤にアナウンサーが「これからのチボリに必要なことは何ですか」という質問したんですね。そうしたら当時の社長は「エンターテイメントを志す人間がチボリで働いてくれることだ」と答えたんです。「えっ!」と思って、状況がわからないから、いろいろと調べたんです。ショーだけで 5 億くらいかかっていたんです。実際はそんなにかかることはないが、初めがどんぶり勘定だったんでそんなコストになっていた。



もし、社長に話をすることができたら…。チボリに必要なことって、チボリでしか観ることができないショーを作ることではないかと思ったんです。絶対僕は雇ってもらえると思った。もうそう思い始めたら、居ても立ってもいられなくなって…よく考えたら、今はまだ無理って気がついたんです。だからまず、チボリの森を復活させる署名運動を行ったんです。ディズニーには 15 年働いてくれと言われたが、契約は 1 年更新なので、なんとかなるか…。それよりもチボリの署名運動を行って社長が分かったといったら、チボリで教えることもできるし、ショーも作ると。

小原: 誠先生に初めてお会いした時から、この人は只者ではないと感じてただけ…。1年目でディズニーのセンターポジションで踊ることもさることながら、報酬にしても知名度にしても相当高いのに、それを投げ打ってでもチボリを復活させたいという思いの強さって…。

今川: 本当にファンとの繋がりや、同僚のダンサーたちが素晴らしい人たちばかりで…当時、チボリをなんでなくすんだろうという思いがとても強くて、悔しかったんですね。

古閑：それで署名運動をされたんですか？

今川：ええ。休みのたびに東京から倉敷に帰ってきて署名運動を行いました。2ヶ月で1,000人集まったので大したものだと思っていたんですが、ホームページに僕の住所を掲載しても良いので、署名していただけるのであれば送って下さいと言って。最終的には8,500人くらいの署名が集まったんです。

古閑：凄いですね！

今川：これなら直談判できるだろうと、当時の社長に電話をしたんですが…秘書の方が出られて、「今川さんが署名活動をしていたのは知っているが、しかしながら、チボリはテーマパークではなく、プログラムパークとしてやっているの、お繋ぎできません」と切られて…。でもそこは九州男児なもんで、絶対諦めない。それならばと腹を括って、ディズニーに辞めさせてくれと言ったんですよ。

小原：働き口を捨ててまで？。



今川：はい、ディズニーの仲間からも、一番自分を買ってくれてた人からも大反対されました。そりゃそうですね。でも自分の中では、ディズニーには僕の代わりはいるが、チボリは自分にしかできないと思って…。もう完全に、自分の心に火がついたので、署名の話もして理解してもらったんです。

でもチボリで働かせてもらっていない今の段階では、ショーを復活させるなんて、遠い先のことで…まずやれることはダンスを教えることだったので、ダンススタジオをやって力を蓄えようと考えたんです。スタジオを一から作るのにはお金がかかるので、倉敷の不動産屋に物件を当たってもらったら、浦田に倉庫式事務所があったので、それを借りて400万借金して始めたんです。始めは生徒いないので、とりあえず2,000人の人に会おうと思って営業活動を始めたんです「ダンス教室をしているので」と…。ディズニーで働いていたプライドなんか一切捨てて…。営業に行ったら、よく踊ってと言われました（苦笑）。

もともと九州出身なので、倉敷や岡山には知り合いがいなかったんですが、チボリ時代から何人かのお母さん方と交流があったので、その方々の繋がり、なんとかここまでやってこれたんです。

最終的に当時のチボリの社長にお会いできたんですよ。でも、社長はその話は知らなかった。結局その社長も退かれて、次の社長とは話は進んだんです。次の社長はもう僕を雇うと決めてくれていたんです。しかしタイミングが悪いことに、その時期に、本社デンマークと名前のロイヤリティのこともめだして…新たらしい遊具を30億かけて入れろと言われて…できなくて、2009年には名前が使えなくなって、デンマークとの契約を断念し、その後閉園です。

古閑：そこまでして漕ぎ付けたのに…。悔しいというか…やり切れない気持ちで一杯だったんじゃないですか。

今川：正直なところ、それはありましたよ。でも、自分は何がしたかったのかと、よくよく考えてみると、チボリを立て直すという目標は手段だったんです。僕が本当に求めているのは、岡山でプロの踊れる場所を作りたい、そこで踊れるダンサーを育成したいという思いだったんです。

小原：なるほど、チボリという名前というか、ブランドを復活させることではなかったんですね。

今川：そうです。僕は、報酬を頂くプロのダンサーという仕事を始めてさせて頂いたのがチボリだったんですが、そこで切磋琢磨しながら共に成長し働いていたダンサー仲間や、いつも観に来てくれていたファンの方も巻き込んで、一つのショーを完成させるという“今”しかない「場」が好きだったんだと気がついたんです。だからこそ、恩返しの意味も込めてですけど、この岡山で、そういう切磋琢磨しながら共に成長し合える仲間が集う「場」、ファンと密な交流ができる「場」を作りたいんです。

小原：誠先生にとってのチボリでの体験は、本当に心を震わせたんでしょうね。もう使命という感じになってますね。お話を伺っていると、私も胸が熱くなってきました。想いを共有する仲間やファンの存在って、本当に嬉しいものなんじゃないかな。

今川：はい。もちろんダンスへの想いもあります、でも人との繋がりって一番大切だと思うんですよ。

子ども達が学芸会のように踊っているとは思われないんです。子ども達がここまで踊るのか！と思われない。最終的には東京の人が視察に来るようなことをしたいです。

古閑：そうですね。誠先生の想いが形になったのが、マコトダンスカンパニーですね。

今川：ええ、でも切磋琢磨して共に成長し合える仲間が集う「場」、ダンサーを育成するという事は実現しています。しかし、残念ながらのですが、ディズニーや四季に行きたい子が多く、ここで育った子を東京に送り出さないとけない。そうではなくて、岡山で活躍できる「場」を作りたいんです。もちろん、子ども達はチボリを知らないし、やはり有名なところに憧れ、夢や目標にして頑張っています。それは素晴らしいことなんです。ここからさらに高みに登って才能を開花させてくれるのは、僕も本当に嬉しいです…。



ただ、才能のある子ども達の殆どが都会へ取られてしまうのが残念でならないんです。岡山からスターを出したい。劇団四季では有名にはなれない。だから岡山でダンサーが活躍できるような土壌が必要なんです。これは大人の問題なんです。

小原：確かにそうですね。子ども達が有名なところを夢見て頑張るのは当たり前ですし、それはとても良いことですが、地元で活躍するところがないというのは、その通りですね。

岡山でエンターテインメントを根付かせるとして、どういうことをすれば良いのでしょうか。

今川：それは僕も試行錯誤しながら、それこそ地元岡山の企業や住民の皆さんの知恵をいただきながら、少しずつやっています。今、大きなチャンスが来ているのですが、これを絶対成功させたいんです。そしてひとつの成功事例を作って、今後、エンターテインメントと地域が結びつくことで相乗効果が生まれるようにしていきたいんです。岡山倉敷でエンターテインメントと呼ばれる文化を作りたいんです。

例えば、観光に貢献することもできます。海外からのお客も喜ばれるようなことも。昼間に美観地区を觀てもらって、夕方からは外国人が好きそうな「侍」的なショーを企画するなど。岡山の後樂園や美観地区の船など岡山の見どころを満載したコラボのエンターテインメントなども面白いですよ。

協賛の取り方も工夫できますよね。収益を出そうとすると相当数のチケットを裁かないとけない。なので旅行会社のコースに組み込んでもらって、パック料金の中にチケット代を含んで売ってもらうなど、旅行とのセット商品とか。僕たちは人が集まることを企画して演るので、それを活用して、ショップとの連携で **10%OFF** で買えますとか、コラボしてもらっても良い。そういった協賛の仕組みも作っていきたい。実際、岡山では、有名なアーティストでない限り協賛でチケットを裁かないとよっぽどは無理です。



小原：それは面白いアイデアですね。

今川：でしょう。そのためには、毎年やっている『DANCE EMOTION』も、もっと作品力を高めなければと思っています。子ども達が学芸会のように踊っているとは思われないんです。子ども達がここまで踊るのか！と思われない。最終的には東京の人が視察に来るようなことをしたいです。

うちのダンススクールは、M's (トップ) を頂点に3段階のピラミッドに分かれているのですが、ショーの第1部はM's プロによるショーにしますというようにする。M's だけしか出れない。そして来年はミュージカルにしたい。ショーとミュージカル両方できる子は少ないんですよ。安室奈美恵のような。それができるのをM's にしたい。M's をプロにしたいんです。だから、第1部は発表会という言い方はせず、プロのM's がショーとして売れるようにしたい。

小原：子ども達を指導している立場として、気をつけていることなどありますか。

今川：そうですね、本気度や習熟度、精神の発達の度合いに合わせて教え方を考えていることですかね。やはり様々な子ども達が来ます。覚えが悪い子、ステップを100回教えてもできない子、でも101回目でできた時はとても嬉しい。本人も嬉しいし、僕も嬉しい。100回までの間に教えるのを諦めようと思うこともあるが、そう思っても絶対僕は諦めないで、101回目でできた時には、そんな思いは全て報われるんです。またプロになりたいという子はどうるさく言います。挨拶など特に、人間力が大切だということを徹底的に教えます。媚を売ったり八方美人になりなさいとは言わない、礼儀正しいと言われる方が嬉しいでしょうって。

まあでも子ども達にはしょっちゅう本気で怒っていますね(笑)。この子ども達は心が

折れない。頑張ることは当たり前のこと。大切なのは人間力とダンス力の両方を上げていかなければいけないこと。プロになってもダンスだけでは消えていくんです。人間力が必要です。僕も岡山に帰ってからの13年間、コミュニケーションを一番大事にしてきました。

それに、親の大切さ、ありがたさは僕が伝えています。悩みがある子は踊りに出るんです。うち子ども達は僕には何でも話してくれるますから。親に言えないこともあるじゃないですか。また親のありがたさがわからず、わがままを言っている子とか…。

子ども達に伝えたいことはたくさんあります。ダンスでプロになることは全てではなく、ここで学んでいたことが役に立つようにしたいんです。

小原：取材中にここを通過して帰っていた子達も、小さいのにきちんと挨拶してましたね。誠先生の思いが形になっているスクールですね。『DANCE EMOTION 6 ～未来を信じて～』のメイキング映像の中では、子ども達が真剣に練習に励んでいる姿が映ってましたね…そして公演後に応援してくれているご両親や友達、仲間と抱き合っただけで涙を流しているのを見ると、この子達は素晴らしい時間を過ごしているんだなあって、感動しました。こういう場を作り上げる誠先生も素晴らしい。

今川：小原先生、ありがとうございます。まだ僕の中では3合目くらいなんですよ。まだ終わっていませんよ。それにディズニーの時より体重が増えてしまって…15kg重いので、もう一回体重を落として現役の体を作って、当時より上手く踊れると思うので、まだまだやります！

実際には上手くいかなくて辛い時期も何度もありましたが…裏切られたりとか、すぐ信用するタイプなので…。でもそういうことも、過ぎた感じもしなくて…でも情熱はまだあるので、止まっている。過去とも思わないし、時間が止まっている。そういう感覚がある。変わったのは生徒がたくさんいて、応援してくれる方も増えたこと。それがあって今は幸せだと思っています。

古閑：何だか、誠先生の方が年上じゃないかと思いはじめました…。僕らよりよっぽど人生経験を積まれた大人ですね。

今川：いえいえ…一緒にしないでください。僕はまだ若輩者ですよ（笑）。

小原：いやいや、大切なことを気づかせていただきました。

誠先生には3月21日（木）19:00～第15回「気まぐれ！メンズトーク」のゲストとしてご出演頂きますので、また面白いお話が聞けますよね…新しいイベント情報もお届けできるはずですよ？



今川：そうですね。6月4日、5日におかやま未来ホールで開催の「紅に燃ゆる～真田幸村 紅蓮の奏乱～」ですね。これは僕の師匠でもある「はやみ甲先生」が率いている、大阪松竹歌劇団が公演するのですが、感動して目が潤むくらい凄いですよ。是非、観に行ってください。

古閑：あ～それは興味あります！真田幸村と言えば今、旬ですしね。

小原：実はね僕はもうチケット買ったよ！

古閑：早っ！？

今川：小原先生、ありがとうございます！素晴らしい公演であることは僕が保証しますよ！間違いありませんから！古閑さんも是非！

古閑：ですね！

小原：今日はお忙しい中、ありがとうございました！誠先生、熱いので長時間にもかかわらずあつという間に感じられましたね。

今川：こちらこそ、ありがとうございました。すいません、つい熱くなってしまって…(笑)。でも楽しかったです！

古閑：ほんと、こちらこそですよ。誠先生のような熱い先生の言葉って、大人の私タイにも響きました！

小原：確かに！では誠先生、次回はラジオで！よろしくお願ひしますね。ありがとうございました。

今川：ありがとうございました。

.....

■MAKOTO DANCE COMPANY

〒701-0151 岡山市北区平野920 (わたなべ生鮮館2F)
TEL.090-6840-5440 E-mail : mdc@active-dream.jp

■ 小原整骨院 (本院)

〒712-8014 倉敷市連島中央 2-3-22 TEL&FAX : 086-444-9595
受付時間

受付時間	月	火	水	木	金	土	日
8:00~13:00	○	○	○	○	○	○	×
15:00~19:15	○	○	○	×	○	×	×

こはら鍼灸整骨院 (倉敷分院)

〒710-0003 倉敷市平田 615-1 TEL : 086-486-3363

株式会社エミリンク (小原整骨院)

Copyright (c) 2014 Emilink.Co.,Ltd. All Rights Reserved.